

ニュー・イングランドにおける新島襄の足跡

井 上 勝 也

私は、五十二年三月から五十三年三月までちょうど一年間、「新島襄の教育思想形成過程の研究」というテーマのもとに、アーモスト大学に留学を認められた。そこでニュー・イングランドを中心として新島襄の思想形成に関係のあった場所を訪れ、重要な人物について今まで不明であった点を明確にすることに努めた。その中で興味深い発見をいくつか報告したいと思う。

I セイボリー船長

(Capt. William T. Savory)

新島の密航を援助し、函館から上海まで彼に乗船を許したベルリン号のセイボリー船長

とはどのような人物であったのか。元治元年（一八六四年）旧暦六月十四日の夜に新島がベルリン号に乗り込んだことは、彼の航海日誌や父親あての手紙ではっきりしているが、彼がベルリン号に乗船する二日前にセイボリー船長と会っていることは注目に価する。当時日本人の海外渡航は厳禁であったし、外国船が密航者を援助することも厳禁されていた。そのような状況の中で、セイボリー船長が何故に新島の密航を援助したのか。新島がボーター商会(?)でセイボリー船長に会ったときに、彼は密航の理由として「聖書を日本語に翻訳するために英語を学びたい」といったと後年セイボリー船長は語っている。聖書を

学びたいという新島を助けたセイボリー船長は、マサチューセッツ州セイラムの出身であることがわかっている。セイラムで彼についての資料を探してみた。当地のエセックス・インスティテュートという歴史図書館が所蔵している「Salem Vessels and Their Voyages」という書物の中で、ウィリアム・T・セイボリー船長について書かれていることを要約すると、彼は一八二七年セイラムで生まれ、船乗りの学校を卒業後、十七歳のときに処女航海に出た。多くの船に乗り世界中を航海し、一八六一年から六五年の間は中国沿岸を航行していた。しばらくの間カリフォルニアで金鉱の採掘をやったが、それをやめ

て再び船乗りになり、後にセイラムでビジネスに従事した。健康を害したので数年フロリダで過ごし、一八九七年同地で亡くなった。告別式はセイラムの第一教会で行われ、ハーモニー・グローブ共同墓地に埋葬された。

ここで明らかになったことは、セイボリー船長は、新島の密航を援助したことが所属船会社にばれて船長を首になった後も、しばらくしてから別の船の船長をつづけていることと、彼の所属教会、宗派についてである。セイラムの第一教会は十九世紀の前半はコンダリゲーションナル・チャーチ（同志社と同じ会衆派）であったが、十九世紀の後半になってユニテリアンに宗派変えをしている。しかし、セイボリー船長は亡くなるまでこの教会に留まったということから、彼がユニテリアンに理解のあるコンダリゲーションナリストであったと考えられよう。当時、日本人の密航を援助することが大変な危険をおかすことがわかっていても、キリスト教を学びたいという新島の熱意に動かされて、彼は密航を助けたのであろう。工学部の大鉢忠先生と一緒に、彼の埋葬されているハーモニー・グローブ共同墓地に行った。管理人の案内でセイボリー家

の墓地に行くと、両親の墓石はあったが、セイボリー船長の墓石がない。墓地事務所に保管されている埋葬記録によって、父親の横に埋葬されていることがわかっていた。管理人の説明では、雪や氷で墓石が割れることがあり、その場合はかたづけしてしまうとのことであった。

* *"Life and Letters of Joseph Hardy Neesim"* p. 2

II テイラー船長

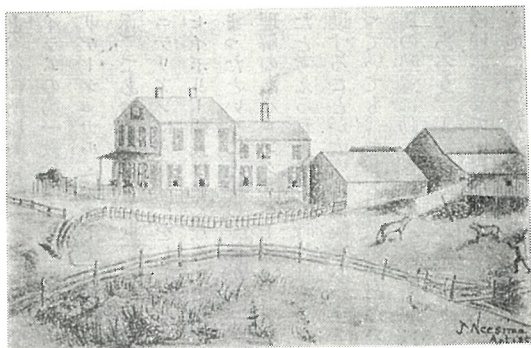
(Capt. Horace S. Taylor)

新島とテイラー船長との出会いは一八六四年七月九日、彼が上海でベルリン号からワイルド・ローヴァー号に移乗した日に始まる。

中国沿岸から南シナ海、インド洋を経て、ケープ・タウン沖を回り、大西洋に入ってボストンに着くまでの一年余、一、一〇〇トンの大型帆船ワイルド・ローヴァー号の航海は比較的順風であった。一八二九年生まれで当時三十五歳のテイラー船長はキャビン・ボーイ新島をジョーと呼び、彼に英語の聖書を与え、親切に航海術を教えてくれた。海上での生活は、陸上以上に二人の間を親密にし、クリス

チャンである船長は新島の誠実さに動かされ、彼のキリスト教を学びたいという強い願望をかなえてやろうという気持ちを抱くようになった。一八六五年七月二十日、ワイルド・ローヴァー号は東ボストン港に着き、船長はケープ・コッドの両親の家に帰った。十月になって、彼は船主アルフュース・ハーディー夫妻を連れて船にもどってきた。既に新島の願望が詳しく夫妻に伝えられていた。夫妻は新島の書いた密航理由書を読んで感激し、彼が理事をしているアンドーヴァーのフィリッパス・アカデミーに新島を入学させることにした。

新島は六六年、六七年、六九年の夏休みをテイラー船長の両親の家で過ごしている。彼は六九年四月二十八日、船長の両親の金婚式に招かれた。ボストンでテイラー家の人々と合流し、チャタムへ向かった。船長は記念として総勢四十七人に及ぶテイラー家および親戚の顔写真を額にして両親に贈った。新島はミス・ヒドゥン（後述）あての手紙で、自分の顔写真も含まれていることを絵入りで示しながら、「私は彼らの家族の一員として数えられました。」と書いている。私はチャタム



チャタムのテイラー家

(テイラー船長の両親の家に新島が夏休みを過ごしていた間にスケッチしたもの。)

へ調査に行き、この顔写真の額が同地の歴史協会博物館にあることを知った。フィリップス・アカデミーかあるいはアーモスト大学時代の新島の顔写真が、四十七人のテイラー家の人々の中でテイラー船長夫妻に囲まれていた。この金婚式が祝われて八カ月後の同年十二月十一日の夜、テイラー船長は思いがけない事故に遭った。当時の新聞によると、それはボストンから妻子の住んでいる東ボストン

へ帰る途中、彼の乗ったフェリーが東ボストン側の岸壁に着いたとき、彼は上陸せんとして足をふみはずし、フェリーと岸壁の間にはさまれてひん死の重傷を負って、近所の薬屋に運ばれたが、数分後に亡くなったということである。テイラー船長が事故に遭った二日後の十三日、新島はアーモスト大学の寮で船長の死を知らせる電報を受けとった。彼は、船長とは十週間前にチャタムの彼の両親の家で別れたばかりであった。早速彼は未亡人を見舞うために東ボストンに急行した。新島には一八六四年七月九日以降のテイラー船長の姿が走馬燈のようによみがえってきた。新島より十四歳年上の彼は、新島を弟のようにかわいがり、父親のように優しく遇してくれた。生後数カ月の一人息子をかかえて突然の夫の死に悲嘆にくれている未亡人を慰めるために、新島は、「ヨハネの黙示録」七章十七節から次の聖句をおくっている。「御座の正面にいます小羊は彼らの牧者となって、いのちの水の泉に導いてくださるであらう。また神は彼らの目から涙をことごとくぬぐいにとってくださるであらう」。

テイラー船長はボストンのホレスト・ヒル

ズ共同墓地に埋葬されていた。テイラー家の墓地には彼の両親や奥さんを含めて七人が埋葬されており、一人息子のホレイス・S・テイラーJr.は父親の後を追うようにして翌年亡くなっている。埋葬記録によれば父親の棺の上に重ねるようにして埋葬されている。新島のミス・ヒドゥンあての手紙およびチャタムの歴史協会所蔵の資料から、テイラー船長はバプテストであることがわかった。

* A letter from Joseph Nesima to Miss Hidden, 12th May, 1869.

Ⅲ ワイルド・ローヴァー号 (Wild Rover)

ワイルド・ローヴァー号については、セイルムのビーボディ・ミュージアムの蔵書、「Merchant Sail」に詳しいので、次に引用したい。同号は一八五三年メイン州のダマリスコッタの造船所で建造され、所有者はアルフュース・ハーディー・アンド・カンパニー。重さ一、一〇〇トン、長さ一八七フィート、横三十六フィート、深さ二十二フィートである。一八五〇年代はボストン、ニューヨークからケープホーン回りでサン・フランシ

スコまで何日で航海できるかによって、その船の性能や船長の腕まえが評価されたが、ワイルド・ローヴァー号は平均一五〇日かかり、クリッパー船の中では船足の遅いほうである。最初は大西洋航路の貿易船として就航していた。一八七一年同号はマニラからの帰航の途中、ニューヨーク州ロング・アイランドで難波した。船齢十八年であった。

なおワイルド・ローヴァー号のボストン入港記事が一八六五年七月二十一日(金)の地元新聞“*Boston Daily Advertiser*”に出ていた。“PORT OF BOSTON THURSDAY JULY 20, ARRIVED Ship Wild Rover (of Boston) Taylor, Manila April 10—Passed Anjel April 25 □ poke May 30 lat 3125S lon 2440”と記されていた。□の部分は判読したが、新島の「航海日記」によれば、May 30にはCape Townの近くを航行していたことになる。同号の入港地点は東ボストンの南端ではないかと思う。

ワイルド・ローヴァー号の「航海日誌」(一八六五年)が現存することがわかった。目下、大鉢忠先生が、所有者の所在を鋭意追求中である。

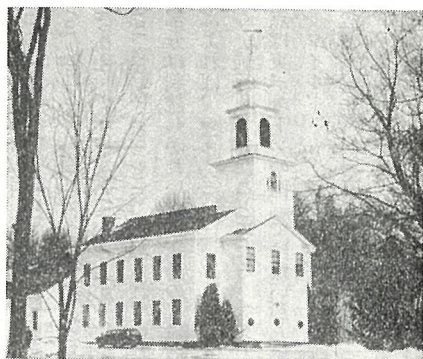
ワイルド・ローヴァー号の油絵は、アーモスト大学とハーディーの曾孫のゲルストン・ハーディー氏の尽力で、同志社創立九十周年を記念して、同志社に一時貸し出されたが、現在はハーディーおよびテイラー船長の故郷であるケーブ・コッドのチャタム歴史協会博物館に陳列されている。ちなみに、この油絵は絵の下端に“SHIP WILDROVER H. S. TAYLOR DEC. 2nd 1864”とあり、この日付けからして、ちょうど新島が乗船していたころの同号が描かれていることになる。

N エドゥン家およびミス・ヒドゥン (Miss Mary E. Hidden)

一八六五年十月、ハーディーにつれられてフィリップス・アカデミーにやってきた新島は、まだ英語がじゅうぶん話せなかった。そこでハーディーはテイラー校長(Dr. Samuel H. Taylor)に相談したところ、新島を寮に入れずにホーム・ステイさせることになり、ヒドゥン家を推せんしてくれた。新島は、ヒドゥン家に、フィリップス・アカデミーを卒業してアーモスト大学に入学するまで約一年十カ月の間、住むことになった。今まで、こ

のヒドゥン家がどこにあり、ミス・ヒドゥンがどのような人物であったかを詳細に知ることができなかった。私は大鉢忠先生とフィリップス・アカデミーに行き、いろいろ調査の結果、両者を明確にすることができた。ヒドゥン家は、フィリップス・アカデミーのキャンパスから南西に歩いておよそ五、六分のところにあった。現在の持ち主である医者の子ヤリア博士は、ヒドゥン家の歴史を詳しく話してくれた。彼が一九五一年にこの家を買ったとき、近所の老婆が「自分は小さいころこの家にニイシマという日本の青年が住んでいたことを覚えている」というのを聞いたという。ヤリア博士の言を裏づける資料がアンダーヴァーの歴史協会にあった。新島がホーム・ステイしていたころのヒドゥン家は、一、二階に各々四室あり、三階は物置に使われていた。ミス・ヒドゥンは独身の弟デビッドといっしょに小規模な農業・養鶏・牧畜に従事していたらしい。二十二歳の新島が彼女の家に住み込んだときには、彼女は四十七歳、弟は四十二歳であった。

新島がこのミス・ヒドゥンから宗教的感化を受けていることは、“*Life and Letters*”や



Hinsdale Congregational Church
(フリント牧師の教会)

新島のミス・ヒドゥンあての五十通に及ぶ書簡^{*}によってもじゅうぶん推察されるが、地元新聞に載った彼女の死亡記事や歴史協会所蔵の資料から、ミス・ヒドゥンのプロフィールを描いてみよう。ミス・ヒドゥンは、彼女の世代では並はずれた知性と幅広い教養の持ち主で、十九歳のときに会衆派教会であるオールド・サウス教会のメンバーとなり、一八九三年七十五歳で亡くなるまで同教会の熱心なメンバーであった。彼女は特にサンデー・スクール活動に熱心で、彼女が新島を連れてサンデー・スクールに出席していたことに

いて、長年サンデー・スクールの教師を勤め、新島が亡くなった一八九〇年に彼の短かい伝記を出版したミス・ヤッキン (Miss Phebe Fuller McKean) が書いてゐる。晩年のミス・ヒドゥンは体の衰弱のために教会活動がじゅうぶんにはできなくなっていた。彼女の死は二週間ばかりの短かい病気の後にやってきたもので、心臓まひが致命症になった。

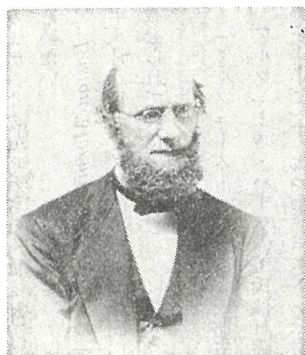
彼女の五十二歳ごろに撮られた写真が歴史協会で見つかった。髪の毛を三つ編みにしているので二十歳代に見えるが、表情は厳しい。彼女の墓はオールド・サウス教会の墓地にあった。彼女は生涯コングリゲーションナリストであったといえる。

^{*} 一八六七年から一八八五年にいたる十八年間のもので、現在マサチューセッツ州アンドーヴァー・ニュートン神学校図書館が収蔵している。一九七七年十一月、O・ケリー教授が「新島襄のメリー・E・ヒドゥン宛の書簡」と題する冊子に全部を収録して出版された。

V フイレ임・フリント (Ephraim Flint, Jr.)

新島が一八六五年十月、フィリップス・アカデミーに入学してヒドゥン家にホーム・ステイするようになったとき、同家にはフリントという当時アンドーヴァー神学校の学生が妻といっしょに住んでいた。ミス・ヒドゥンは「彼(新島)筆者」がフリントさんから得ている利益は実際アカデミーの先生からよりもはるかに大きいです^{*}とハーディーに書き送っているが、このフリントが、新島のアメリカでの思想形成特にキリスト教観の形成に重要な役割を果たしたことが、種々の資料からじゅうぶん推察できる。そこで私はフリントなる人物を調べてみた。彼は一八二八年十一月二十八日にマサチューセッツ州リンカーンに生まれ、村の小学校を終えてからアンドーヴァーのフィリップス・アカデミーやグロートンのローレンス・アカデミーに学び、一八五一年ウイリアムズ・カレッジを卒業した。卒業後教職に就き、各地のアカデミーの校長を勤めたが、一八六五年三十七歳のときに教会活動こそ自己の天職と考え、校長の職を捨

てアンドーヴァー神学校に入學した。ここで新島との出会いが始まる。一八六七年同校を卒業後、マサチューセッツ州ヒンスデールの会衆派教会に牧師として赴任し、以後一八八二年十一月二十八日、牧師館の書齋で感謝祭のための説教原稿を執筆中、心臓まひで亡くなるまで、十五年間同教会の牧師を勤めた。フリントが新島に教えた最初の聖句は「ヨハネ伝」三章十六節であった。^{***}新島のほうからこの聖句の解釈を求めたのであろう。この句は、日本であるいは一年余りの海上生活中に聖書をくり返して読み、彼が最も感銘を受けた個所である。彼は一八六四年十一月十一日、香港で漢訳聖書を買ひ、読み進むうちに「ヨハネ伝」三章十六節が万星中の太陽のごときもので、福音の精髓であると悟ったという。あの膨大な聖書の中で、この句が福音の精髓であると悟るには、かなり深い聖書の、あるいはキリスト教についての予備知識が必要であった。フリントは新島がフィリッ布斯・アカデミーを卒業してアーモスト・カレッジに入学する直前、ハーディーの求めに応じて、アーモスト・カレッジのシリー教授(Prof. Julius H. Seelye)に新島について



Julius H. Seelye
(新島の1870年度卒業アルバムから)

の紹介状を書き送っている。その中でフリントは「私は彼(新島―筆者)ほど神の言葉に熱中している人を知りません。彼は神の言葉の意味をいかなる他の書物のそれよりもすみやかに理解しています。……彼の宗教上の進歩は顕著です。私は彼がアンドーヴァーに着く前に回心していたのではないかと思うのです。真理が彼の心に触れるやいなや、彼はそれを会得するすべての準備ができているように思われました。」^{***}と書いている。

新島はアーモスト・カレッジ在学中、一八六七年と六八年の冬休みをヒンスデールの牧師館でフリント夫妻と過ごしている。彼は、一八六八年十二月ヒンスデールのバイブル・ソサエティーの終身会員になったことが地元の

新聞(“BERKSHIRE COUNTY EAGLE.” Dec. 31, 1868)に載っていた。ちなみに、バイブル・ソサエティーの会長はフリント牧師である。

子供のなかったフリント夫妻は新島を弟のごとくかわいがり、新島もときには師として、ときには兄弟として彼らに對していたことが、ミス・ヒドゥンあての書簡などからうかがえる。

フリント牧師が亡くなった翌年、彼が牧した教会で次のような決議案が採択された。その一部を訳出しよう。「フリント博士は常に明白である卓越した靈性をもち、有能で忠実で教訓的な説教者であった。牧師としては彼はすべての人々、特に病める人、悲しんでいる人、貧しい人、困っている人に献身的で、思いやりに富み、親切であった。この教会と教区の子供たちや青年に對しても、彼は父のごとき関心と母のごとき愛情をもっていた。彼は、彼らが救われるように、常に彼らのために神に願いかつ祈った」^{***}。新島は一八七四年七月、アンドーヴァー神学校を卒業し、同年九月、ボストンのマウント・ヴァーノン教会で牧師就任のための按手礼を受けた。フリ

ント牧師はヒンスデルから出席して、愛する教子新島の将来を祝福している。

プリントの墓は、故郷リンカーンの彼の生家の近く、スリー・コーナード共同墓地にあった。墓碑に“WELL DONE”と刻まれているのが印象的であった。

* *Life and Letters*, p. 51

** Commemoration of the CENTENNIAL of the Congregational Church, HINSDALE, MASS., 1895, p. 76

*** *Life and Letters*, p. 69

**** MEMORIAL OF REV. EPHRAIM FLINT, D. D. (no date, probably 1883, no publisher) p. 27

VI アルフュース・ハーディー (Alpheus Hardy)

新島にとって最大の恩人はアルフュース・ハーディーであるが、新島が彼の死を悼んで行った追悼説教（明治二十年十一月二十日）の草稿（「新島研究」²⁰、4取載）がのこされているだけで、今まで彼を知りうる資料に乏しかった。私は今回の研究調査でハーディーについての資料の収集に努めたが、誌面の都合で地元新聞に載った彼の死亡記事を全訳して、

ハーディーの知られざる一面を紹介するにとどめたい。

“*Boston Morning Journal*”の一九八七年八月八日（月）号に次のような死亡記事が載せられていた。

「アルフュース・ハーディー氏逝去さる

アルフュース・ハーディー氏は日曜日の午後三時半に亡くなった。ボストンは最も尊敬されている市民の一人を失った。彼と交友のあった人々は、まじめで信頼できる友の死を悼まねばならない。ハーディー氏は決して目だつことを求めなかったし、政治上の拔擢（はくしやく）に關してもそれをさけた。しかし彼の声望と手腕は彼を高い地位につけずにはおかなかった。彼の死は、それがささいなことと思われるようなできごと——クローポンを切る鋏（はさみ）が落ちた——の結果やってきたものである。特に悲しむべきである。ハーディー氏は一八一五年十一月一日、マサチューセッツ州チャタムに生まれた。ボストンでの彼の初期の商業上の關係はエツラ・H・ペイカーとであり、しばらく二人は大規模な穀類の売買および海運

業を営んでいたが、その後共同事業は解消されて、ペイカー氏はハーディー・ペイカー・アンド・モリル商会に加わった。他方ハーディー氏は前述の事業を継続した。彼はまた、ボストン港から出ていく、最もすばらしく、最も大きな船の幾つかを含む相当数の船舶を生涯にわたって所有していた。ハーディー氏の最大の事業は、故ジョシュア・シアーズのばくだいな財産の管理であった。彼はシアーズ氏とは個人的にたいへん親しく、シアーズ氏が死に臨んでその管理を彼の信頼すべき友に託し、それは極めて忠実に守られた。ハーディー氏は保管上共同者を求めたので、ホレイショ・ハリス氏とヒュー・モントゴメリー氏が拘束なしで保管人になった。しかし、これら二人の紳士は数年前に亡くなった。彼の友の大きな信頼は確証された。というのは、ハーディー氏の監督のもとでシアーズ氏の財産は大いにその価値を増し、詳細な管理の記録がのこされていたからである。モントゴメリー・シアーズ氏——ハーディー氏が彼の後见人である——はハーディー家につれてこれら、ハーディー氏の忠実で情愛のこもった行為によって、家族の一員としての地位を保持

しつづけた。政治的にはハーディー氏の生涯には語られるべき多くのものがある。一八六一年に彼はマサチューセッツ州議会上院に席をおいて、ノーフォーク地方を代表しており、数年後彼はボストン市長に指名された。しかし彼はこの申し出を断り、同様の他の公的な地位に推挙されることも好まなかった。彼は商業会議所のメンバーで、後年彼はデトロイト・ランシング・アンド・ノーザン鉄道の社長を勤め、シカゴ・アンド・ウエストミシガンの取締役でもあった。彼は一八五五年から一八七七年までアーモスト・カレッジの理事で、一八八五年までの長い期間、アンドーヴァー神学校の理事でもあった。彼の宗教界での活動は実り多いものであった。彼は一八五七年にアメリカン・ボード(ABCFM)に加わって、以後三十年間法人のメンバーであった。同年彼は財務委員会に指名され、そこで昨年辞任するまでつとめ、一八七三年以後は財務委員会の議長であった。彼の名声および敏腕の影響は、いたるところで実業家としての自信をそれに与えるので、アメリカン・ボードにとってはそびえ立つ塔のごとき力になっていた。彼はいんぎんで公平に座長

の任務を果たし、常に重要な委員会を助け、その仕事、特に財政的な問題に多くの時間と労力を費やした。恐らく彼の最も顕著な奉仕は、日本のためのものであった。若い日本の伝道者ジョセフ・H・ニイシマはハーディー氏の船の一隻でボストンにやってきて、彼を迎え入れられ、アンドーヴァーとアーモスト・カレッジで、彼の費用で教育を授けられた。ニイシマはその後祖国でキリスト教の仕事をするために送り帰された。日本とのこの特別な関係の結果として、ハーディー氏は日本の伝道分野に大きな関心を示していた。彼はまた宣教師のための二本マストの帆船モニング・スター号と、後ほどその仕事を引き継ぐことになる同じ名前前の蒸気船を建造して太平洋に送り出す手はずをととのえた。彼は市民委員会の議長になったが、その委員会は、バック湾にYMCAのための新しい建造物を造るために発足した。彼は気前よくその事業に寄付をした。彼は理事会の会計責任者に指名された。ハーディー氏は徹底した宗教人で、長年セントラル教会やオールド・サウス教会のメンバーであった。あらゆる点で極めて良心的で尊敬される人であり、彼の社交的

な特徴、彼の礼儀正しさおよび親切さは、彼に多くの頼むに足る友人をつくった。遺族は夫人と四人の息子で、アルフユース・H、チャールズ・F、アーサー・Sおよびエドワード・Eであり、皆ボストンでよく知られている。」

なお“New York Times”にも彼の死亡記事が載っているが、前述のものほど詳しくはない。しかし、「ハーディー氏は正統派コングリゲーションナリストであった」という表現は印象的である。

ハーディー家の墓がハーヴァード大学のあるケンブリッジのマウント・アーヴァン共同墓地にあることがわかった。ハーディー家の十三人が埋葬されており、ハーディーの両親と並んでハーディー夫妻の小さな墓石が半ば雪に埋もれていた。墓碑にはアルフユース・ハーディーの名前と生年・没年が刻まれているだけの簡素なものであった。

(大学文学部教授・教育史)